

2025年10月

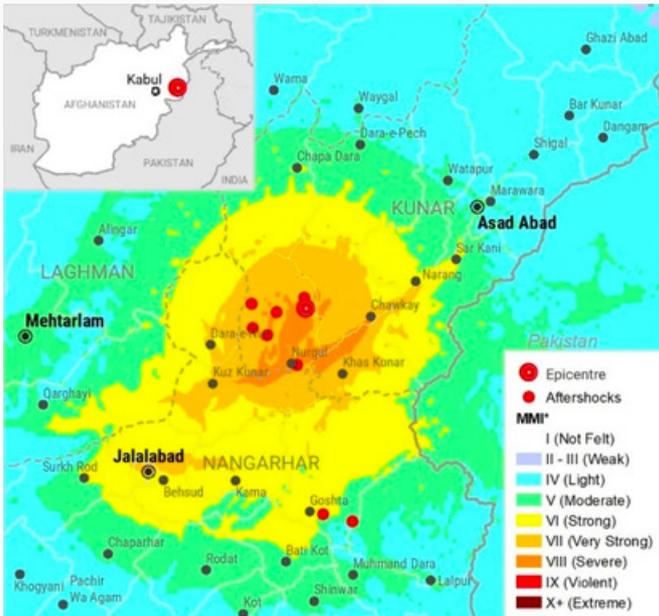
# CWS JAPAN NEWSLETTER NO.109

いつもCWS Japanの活動に温かいご支援、  
ご理解をいただき、ありがとうございます

## アフガニスタン東部地震被災者支援について(続報)

こんにちは、五十嵐豪です。

現地時間2025年8月31日23時47分にアフガニスタン東部を震源とするM6.0の地震が発生しました。被害はナンガルハル県およびクナル県を中心に広がっており、これまでのところ2千人近くが犠牲となり、8千棟以上の家屋が倒壊・損壊しました。



山岳地域でインフラが脆弱であることに加え、震源の深さが10キロ以下と浅く、大きな被害となりました。上述の被災レベルを表す地図は国連調整人道問題調整事務所 (UNOCHA)の報告書より抜粋。

現地の提携団体であるCommunity World Service Asia (CWSA) は発災直後から被災地に職員を派遣し、被害状況の把握と支援ニーズの調査を開始すると同時に、食事の

炊き出しによる支援を開始しました。山岳地域の道路が被害を受けたことにより、発災直後は被災地へのアクセスは限られていましたが、道路の復旧作業が余震に注意しながら進められています。



被災地で炊き出しの食料を配布する様子©CWSA

被災地の標高は数百メートルから、場所によっては2千メートルを超える高地となっており、これから最低気温が0度近くまで下がる冬が到来します。食料や生活必需品といった基本的な支援ニーズに加え、こうした厳しい自然環境に備えるための防寒具などの越冬支援や、保健分野の支援に対するニーズが高まっています。

CWS Japanは、現地提携団体のCWSAと連携して、深刻な生命と尊厳の危機に直面している被災者に対して、迅速かつ柔軟な支援が届けられるように努めてまいります。一人でも多くの人に支援を届けるために、皆さまからの温かい応援とご寄付をお願いいたします。



食料を受ける取る人々はテントで過ごしています  
©CWSA

引き続きみなさまからの温かいご支援をお願いいたします。

(文：ディレクター 五十嵐豪)

# CWS JAPAN 支援活動のための ご協力をお願い

CWS Japanでは、アフガニスタン地震、フィリピン地震の緊急支援を行っています。

皆さまの温かなご支援をお願いいたします。

※CWS Japanへのご寄付は、寄付控除の対象となります。



# 国際防災の日に 寄せて 一災害ではなく、 レジリエンスに投資を

## 国際防災の日とは

毎年10月13日は、国連が定めた「国際防災の日」です。1989年に制定されて以来、世界中の人々が災害リスクへの意識を高め、災害に強い社会づくりについて考える大切な機会となってきました。今年のテーマは「Fund Resilience, Not Disasters (災害ではなく、レジリエンスに投資を)」。

災害が起きてから対応するのではなく、災害に強いコミュニティを事前に築くことの大切さを訴えかけています。

## 災害への「対応」から「備え」へ

気候危機が深刻化する中、アジア太平洋地域では台風、洪水、干ばつなど、さまざまな気候災害リスクが高まっています。また、日本をはじめアジアは地震の影響が大きい地域でもあります。これまでの災害対応は、どうしても災害が起きた後の緊急支援に重点が置かれてきました。しかし、本当に持続可能な社会を築くためには、災害が起きる前にコミュニティの「レジリエンス（回復力・適応力）」を高める投資こそが必要です。

レジリエンスへの投資とは、防災インフラを整備することではありません。地域のコミュニティが、自分たちの力で災害に備え、対応し、そして災害から立ち直っていく—その力を育むことを意味しています。

## インドネシアからの学び | 女性たちが主導する予防的な取り組み

先日、インドネシアのコミュニティを訪れる機会がありました。そこで出会った人々の取り組みは、「レジリエンスへの投資」が実際にどういうものなのかを、具体的に示してくれました。中部ジャワ・サマランガの沿岸コミュニティでは、頻繁に起こる高潮による浸水に、女性たちが立ち向かっ

ています。早期警戒情報として気象庁からの情報の活用はもちろんですが、それだけではありません。風の湿り気、小さなカニが出てくる様子、竹の見え方の変化。こうした昔ながらの知恵も活かしながら、災害の兆候を読み取っているのです。

災害が起きる前に、大切なものを高い場所に移す。高齢者や障害のある方々を安全な場所へ避難させる。さらに素晴らしいのは、コミュニティ内で循環型基金の仕組みを作り、5~10%という手頃な金利で家を高床式にする資金を借りられるようにしていること。通常の民間ローンは30%もの金利がかかりますから、とても助かっているようです。西スマトラのニアスでも、女性主導のコミュニティグループが、循環型レジリエンス基金を立ち上げています。さらに、地域の雑貨店が災害時には共同炊き出しの場所になるなど、ユニークな取り組みも生まれています。マルクのアンボンという場所では、コミュニティが河川管理局と手を組んで川の浚渫（しゅんせつ）を実施。堤防に設置した目盛りで水位を監視しています。「赤ちゃんカニが出てきたら雨季が始まる」という先住民の知恵と、科学的なデータを組み合わせた早期警報システムも機能しています。

これらの事例に共通しているのは、コミュニティ、特に女性たちが主導権を握り、伝統的な知識と科学的な知見をうまく融合させてながら、自分たちの力で災害に備えているということです。国主体の投資も重要ですが、コミュニティの行動が変化して社会としてのレジリエンスに繋がると思っています。

## レジリエンスを築く5つの要素

先日マニラで開催された国際会議で、気候危機の時代における「Triple Nexus+アプローチ」に必要な5要素を提唱してきました。人道支援、開発、平和構築を一体的に捉え、そこに気候変動対策（「+」の部分）を加えたのが「Triple Nexus+アプローチ」と呼ばれるものです。その5要素を以下ご紹介します。

- 要素1：地域のリーダーシップ：本当のレジリエンスは、コミュニティが自分たちで解決策を生み出すところから始まります。
- 要素2：社会的結束：一人ひとりの対処法を、みんなで支え合う力へと変えていくことが重要です。特に紛争の影響を受けた地域では、多様なコミュニティがレジリエンスという共通の目標のもとに結束することが、まさに生き延びるために欠かせません。
- 要素3：積極的なリスク管理：レジリエンスの高いコミュニティは、危機が起きてから対応するのではなく、予測し、準備し、災害リスクをできるだけ減らす活動を平時から実践しています。
- 要素4：制度との連携：持続可能な変化を生むには、あらゆるレベルの行政や組織との連携が必要です。コミュニティから生まれた革新的な取り組みが、より広い開発計画と結びつき、最初の実施段階を超えて広がり、続いていけるようにすることが大切です。
- 要素5：エビデンスに基づく説明責任：行政やコミュニティが自分たちの取り組みを記録し、コミュニティにとって意味のある成果を測り、全体で学びを共有していく。それによって、レジリエンスへの投資に対する市民の信頼が育まれます。こうした信頼は、行政の投資に対する市民の不満に応え、政策づくりや実施への市民参加を意味あるものにしていくために欠かせません。

他のコミュニティにも刺激を与え、それぞれの地域に根ざした解決策を生み出していけるのです。

コミュニティ主導のプロセスを育て、つなげていく。人道支援、開発、平和構築といった別々のプログラムを後から調整しようとするのではなく、設計の段階から、相互に関連する課題に統合的に取り組む。その為には、わたしたちは専門分野の垣根を越えなければなりません。

レジリエンスの課題は、システム全体に関わる問題です。目先の症状だけでなく、根本原因や構造的な要因に取り組む必要があります。社会的結束や信頼は、時間をかけて築かれるものですが、すべての取り組みの土台として欠かせません。コミュニティを本当に中心に据えた考え方によって、わたしたちは真の社会的結束を目指すことができるのです。

10月13日の国際防災の日に寄せて、我々は「災害への対応に投資し続けるのか、それともコミュニティのレジリエンスに投資するのか？」を今一度問いかけてみる必要があると考えています。地球の変化に敏感になり、気候変動の影響から人命やコミュニティを守っていくためには積極的なコミュニティ主導の防災・減災の取り組みが欠かせません。CWS Japanでも引き続きレジリエンス・ムーブメントを目指した活動を展開してまいります。

(文：事務局長 小美野剛)

## プロジェクトから 「ムーブメント」へ

上記の5つの要素が互いに作用し合うとき、わたしたちが目指す「レジリエンス・ムーブメント」が生まれます。強い地域リーダーシップがあれば、社会的結束を築けます。みんなで協力すれば、積極的なリスク管理を実行できます。支援組織と連携し、持続的な影響を生み出し、拡大できます。そして学びを記録し共有すれば、

# グローバルフェスタ JAPAN2025に 初出展しました

こんにちは！CWS Japanの五十嵐望美です。

今回は、先日開催されたグローバルフェスタに初出展した様子を報告いたします。

9月27日（土）と28日（日）に開催された国内最大級の国際協力イベント「グローバル・フェスタJAPAN2025」に、CWS Japanとして初めて出展参加しました。今年は加盟しているジャパン・プラットフォーム（JPF）の共同パビリオンにブース出展を行いました！



CWS JAPANのブースの様子 ©CWS JAPAN

ブースでは、JPFパビリオンとしてキーワードラリーを行ったり、お住まいの地域のハザードマップや避難計画についてのアンケートをとったりしました。また、アフガニスタンの民族衣装を飾り、試着体験コーナーも設けました。

ブースに来てくださった皆さまに、CWS Japanが行っている災害支援・防災支援の活動について、対面の場で直接伝えることのできる貴重な機会となりました！

また、28日（日）に行われた最後のメインステージ企画「ジャパン・プラットフォーム25周年スペシャルステージ 笑顔でつながる未来～人道支援と連携のチカラ～」の第一部パネルディスカッションにて、わたし・五十嵐望美も登壇し、人道支援の現場に携わるNGOスタッフとしてお話をさせていただきました。



職員もアフガニスタンとパキスタンの民族衣装を着て、皆さまを迎えました。©CWS JAPAN



メインステージ企画では立ち見の方も含めて、多くの方が聞いてくださいました！©CWS JAPAN

ステージでは、JPF25周年特別応援団の村山輝星さんが登壇者に質問して下さり、人道支援に関する取り組みや、この仕事をやって良かったこと・大変なことなどを、エピソードを交えながら紹介しました。その後の第二部では松平健さんによる華やかな「マツケンサンバII」もステージで披露され、会場は大いに盛り上がり、グローバルフェスタが締めくくられました。

当日のレポートは、[JPFのウェブサイト](#)からご覧いただけます。

今回のグローバルフェスタへの出展を通して、こんなにも多くの方がさまざまな形で国際協力に関わっていること、そしてその活動の幅広さに改めて驚かされました。

その一方で、ここ数年は世界的にも、そして日本国内でも、国際協力や人道支援の意義が改めて問われる場面が見受けられることも多くなり、困難を感じることも増えてきました。

だからこそ、国際協力や人道支援に携わるNGOの一員として、この支援の輪を途切れさせることなく、人と人とが支え合うつながりを続けていくためにも、その意義を広く伝えていくことも大事なのではないかと感じることができました。

改めて、グローバルフェスタにご来場くださった皆さま、そしてCWS Japanのブースにお立ち寄りくださった皆さま、ありがとうございました！来年以降も、出展参加していきたいと思っておりますので、ぜひまた機会がありましたらお越し下さい。

(文：プロジェクト・オフィサー  
五十嵐望美)

## さまざまなSNSで 情報をお届けしています

CWS Japanでは各種SNSで、日ごろから情報をお届けしています。お好きな方法で最新情報をぜひチェックしてみてください



各種SNSは  
[ここをクリック](#) or  
QRコード読み込み



# 11月5日「世界津波の日」に考える 先人の知恵を未来へ、 命を守る備えを日常に

11月5日は「世界津波の日」。これは、1854年に和歌山県で起きた安政南海地震の際、村人が稲むらに火をつけて津波の危険を知らせ、多くの命を救ったという「稲むらの火」の逸話に由来しています。

津波の脅威は今も変わらず、いつどこで起こるか分かりません。津波の脅威は、世界中多くの国において共通の課題となっています。その中で、私たちが受け継ぐべきものは「恐れること」だけでなく、「知り、備え、伝えること」。

本記事では、国内外の災害支援に取り組むCWS Japanのメンバーがそれぞれの視点から、津波とともに生きてきた人々の知恵、そして未来への備えについて考えたことをお届けします。

## 「世界津波の日」の由来

2015年12月、国連総会において、毎年11月5日は「世界津波の日」と制定されました。11月5日に制定された背景としては、安政南海地震をきっかけに安政元年（1854年）11月5日に和歌山県で起きた大津波の際に、村人が自らの収穫した稲むらに火をつけることで早期に警報を発し、避難させたことにより村民の命を救い、被災地のより良い復興に尽力した「稲むらの火」の逸話に由来しているそうです。

安政南海地震は、「南海トラフ大地震」の歴史的事例のひとつ。この機会に、南海トラフ大地震への備えを改めて考える機会としたいと思います。

参考：  
[世界津波の日 | 津波防災特設サイト](#)  
(コミュニケーション担当：高橋)

## 津波は単なる水ではない

津波は、単なる「水」ではなく、土砂、瓦礫、流木、建物の破片などあらゆるものを巻き込んだ「濁流」で、その分大変危険です。

東日本大震災でも、多くの方が打撲や骨折、切り傷などの重篤な外傷を負いました。さらに瓦礫に挟まれて身動きが取れなくなったり、視界のきかない濁流の中で方向感覚を失い溺れるケース、流れてくる油に火がついて火災が発生することもあります。

単に水に溺れる危険だけでなく、物理的衝撃、身動きの制約、低体温、火災、汚染と、複合的な脅威があるので、津波が発生しているときは高台に逃げるのが何よりも重要です。（事務局長：小美野）

## 小さな違和感が命を守る

津波の際、動物や子どもがいち早くその異変に気づいたという実例があります。2004年のインド洋津波では、観光地で飼育されていた象が異変を察知し、高台へと走って避難した記録があります。

また、英国の少女ティリーさん（当時10歳）は、授業で習った津波の前兆を思い出し、潮が急に引いたのを見て「津波が来る！」と叫び、周囲の人々を避難させて多くの命を守りました。

大人になると、理屈や常識で物事を判断しがちですが、動物の直感や、子どもが訓練を通して学んだ“体の記憶”には、人間が本来持っていたはずの生存本能が宿っていると思います。普段の小さな“違和感”を見逃さない感性こそ、災害時に命を守る力となり、私たちが見習うべき大切な知恵だと感じます。

参考：  
[How a schoolgirl outsmarted a tsunami: The story of Tilly Smith | UNDRR](#)  
(プログラムオフィサー：浜田)

## 先人の知恵を未来につなぐ

「まさか来るとは思わなかった――」  
災害の後に繰り返されるこの言葉を、私たちは教訓として未来に伝えていく必要があります。

先人たちも同じ思いで、神社や寺院を高台など災害リスクの低い場所に建て、津波や洪水の際には避難場所として機能させてきました。長い石段は参拝者を鍛えるためだけでなく、人々を災害から守る役割も果たしていたのです。境内に残る石碑には津波の到達点や教訓が刻まれています。時の経過とともに文字が読めなくなり、その存在が忘れられつつあります。

こうした先人たちの警鐘を掘り起こし、防災への知恵として未来へつなげようとする取り組みを、国土地理院が進めています。

参考：  
自然災害伝承碑  
(ディレクター：五十嵐豪)

## 南三陸町に学ぶ、“心の興”と“想定外への備え”

震災以降、度々訪れている宮城県南三陸町は津波の被害が大きかった地域ですが、先日訪問した時に地元の方が「今は心の復興も必要だ」とお話しされていたのが印象に残っています。津波を体験した人にしかわからない痛みや心の傷は今でも大きいのではないかと感じます。

また、南三陸町にある「～南三陸町東日本大震災伝承館～南三陸311メモリアル」では、震災当時に実際に直面したシチュエーションを提示しながら「高台に逃げるのか」それとも「屋上に避難するのか」について考え、想定外の事態が起きた時に正しい判断をすることの難しさを体験できるプログラムもありました。日ごろからできる限り想定して備えることの大切さを感じました。

参考：  
南三陸町東日本大震災伝承館 南三陸311メモリアル  
(プロジェクトオフィサー：五十嵐望美)

## 子どもに津波をどう伝える？

6歳の息子に「津波についてどう伝えたらいいか」と考え、絵本『津波!!命を救った稲村の火』を買ってみました。(高橋さんが書いてくれている逸話が絵本になっていま

す)読み聞かせを通して、「地震が来たら海に近寄ってはいけない/高台に逃げる」ということを息子は理解したようです。

小さな子どもには直接的な映像などはまだ早い気がして伝え方に悩んでいたのですが、調べてみると日本には地震や津波にまつわる絵本がたくさんあることがわかりました。

「まだわからないだろう」とは思わずに、絵本などを通して、年齢にあった伝え方ができるといいなと思います。

参考：  
津波!! 命を救った稲むらの火  
(コミュニケーション担当：一色)

## いざという時、どう動く？ 「津波てんでんこ」

津波と聞くと私は「津波てんでんこ」を思い出します。もしご存知なければ、ぜひネットなどで調べていただきたい、とても大切な知恵だと思います。

津波の危険があれば急いで逃げるべきですが、不慣れな場所ではどこに逃げればいいのか分からない、観光地などでは混み合っただけで逃げられず、どうにか避難場所にたどり着けても一杯で入れない可能性があるとも聞きます。難しいですが、旅行や出張などの前には、いざという時のことも調べておくべきなのだと思います。

参考：津波てんでんこ  
(アドミン・ファイナンスマネージャー：高松)

以上、津波についての豆知識や情報、経験からの気づきをそれぞれのメンバーからお届けしました。津波の教訓を風化させず、日常生活の中で防災の意識と仕組みが根付くよう、CWS Japanはこれからも国内外活動に取り組んでいきます。

「世界津波の日」をきっかけに、わたしたち一人ひとりが“命を守る日常”を見つめ直す時間となりますように。  
(文：コミュニケーション担当 高橋)

# 中能登町地域日本語 教室ケーススタディ & 大久保まつり出店 & ルワンダカフェ 10月のコミュニティ・ カフェ@大久保

皆さん、こんにちは！CWS Japanの五十嵐望美です。

気温も急激に下がってすっかり本格的な秋の気候になりましたね…！！体調にはくれぐれもお気をつけてお過ごしください。

10月は大久保まつりへの出店をはじめ、イベント盛りだくさんの月でした。今月もコミュニティ・カフェ@大久保のレポート記事をお届けします。

## 中能登町から災害時の教訓を学ぶ 地域日本語教室ケーススタディ

10月1日のカフェでは、能登半島地震の被災地から大湯さんをゲストにお招きし、『災害×地域日本語教室：中能登町地域日本語教室ケーススタディ』を行いました！

### 2025/10/1 災害×地域日本語教室 中能登町ケーススタディ



大湯さんが立ち上げに関わった「中能登にほんごひろば『茶の間』～しゃべらんかいね～」の取り組みや発災時の日本語教室の対応についてお話を伺い、会場の参加者とディスカッションを行いました。

発災直後は外国人住民の情報入手が被災地内においても困難だったことが分かりました。ただし、中能登町在住外国人の半数が技能実習生であり、実習生が勤務する企業と同教室が繋がりを持っていたことは支援を行う中でメリットになったのではないかと思います。



日頃の連携があっても、災害時は連絡を取るのも一苦労だったということで、想定外への対応の難しさについてお話しいただきました©CWS JAPAN

その一方で、「もし東京で大規模災害が発生したらどうなるのか？」を想像し、いま私たちができることは何かをフロアの参加者と話し合いました。

今回、大湯さんから能登の経験をうかがって、地域関係者や外国人コミュニティとの日ごろからの交流や信頼関係形成の大切さをあらためて感じました。



にほんご教室のチラシは、日本語以外に英語・中国語・ベトナム語がありました！©CWS JAPAN

今年も大久保まつりに出店！  
大盛況でした！



10月13日に開催された大久保まつりでは、今年もワールド・バザールとして出店参加しました。

今回は、スリランカ、チュニジア、ミャンマー、エジプト、ネパール、そして日本からも、食べ物や雑貨などを販売しました。



エジプトのザラビア（揚げドーナツ）と  
ファラフェル・サンドイッチ ©CWS JAPAN



チュニジアからは、新たにクスクスランチも  
メニュー入りしました ©CWS JAPAN

当日はどんよりとしたお天気で雨も心配されていたものの、なんとか持ち堪えて、終日たくさんのお客さんと賑わっていました。

朝の仕込みの準備の時は、予定よりもかなり遅れて到着した出店者もいたり、もはや恒例となってしまっている！？ハラハラ・ドキドキの連続でしたが、回を重ねてきて慣れてきたことで、以前よりもスピーディーに準備ができました。

また、オープンから次々とお客さんがワールド・カフェにも足を運んでくださり、お買い求めいただきました！



なかなか見慣れないような珍しいメニューも取り揃えた今回は、13時ごろには食べ物が続々と完売！そして、終了時間前にはほとんど売り切ることができたため、1時間早く店じまいをして、終わりました。

今年も多くのお客様にお越しいただき、好評だったようで、何よりです。



今年も無事に大盛況で終わることができました！  
©CWS JAPAN

## ルワンダ・ジェノサイドから学ぶ 和解と共生の取り組み

普段は平日にオープンしているコミュニティ・カフェですが、今回は臨時で週末にもオープンしてルワンダ・カフェを開催しました。



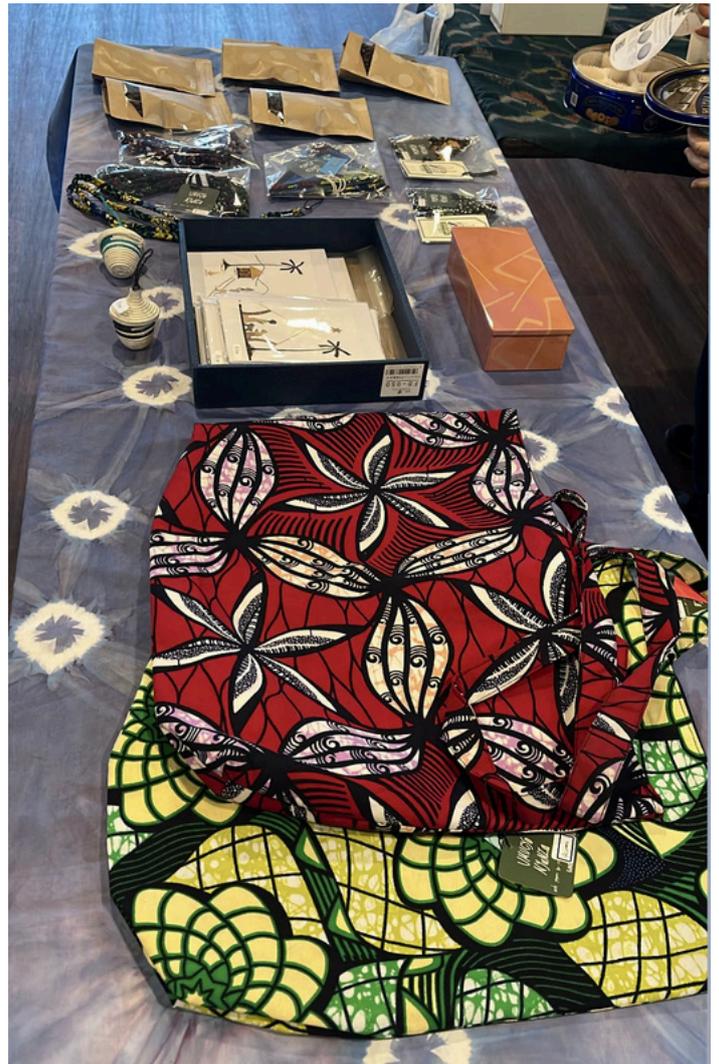
ルワンダは「アフリカの奇跡」と呼ばれるほどこの数十年で目まぐるしい経済発展を遂げている国です。しかし、一方で周辺の地域では対立や紛争が絶えず、今でも多くの難民が発生しています。

特にジェノサイド以降では、ジェノサイドを生き延びた加害者/被害者との和解と共生のための取り組みが行われており、その一つに加害者・被害者となった女性たちのグループ「ウムチョ・ニャンザ」についてご紹介いただきました。

### 2025/10/25 ルワンダ・カフェ



ルワンダは1994年に民族同士の対立によるジェノサイドによって、3ヶ月の間に約80～100万人もの人たちが犠牲になったという大変痛ましい歴史があります。そこで、ジェノサイドで経験した差別や暴力を2度と繰り返さないために、和解と共生のための取り組みをサポートしている佐々木和之・恵さんをお迎えして、現地のお話を伺いました。



ウムチョ・ニャンザの女性たちが手作りした  
グッズも販売しました©CWS JAPAN

また、当日はウムチョ・ニャンザの女性たちが製作したグッズの販売や、ルワンダ・コーヒーの提供もありました。

(ウムチョ・ニャンザの商品はオンラインでもお買い求めいただけます！)

▶ウムチョ・ニャンザオンラインストアはこちら

お話を聞いた後は、和解ワークショップのプチ体験も行い、ジェノサイドによって傷つけられた被害者家族と、ジェノサイドに加担してしまった加害者と、その両者の共通の友人として関係性を修復したい仲介役の3者のロールプレイも参加者同士で演じました。

その後はルワンダから留学生として学んでおられるシュルクさんから、ルワンダの伝統的な踊りについて教えていただきました。

ルワンダにおいて、かつての王国時代には王様に捧げるものとして、植民地時代にはルワンダのアイデンティティを表現するものとして、ジェノサイド後には共同体の修復や癒しの体験として踊られてきたということです。そして、さまざまなダンスや楽器についても紹介してもらった後、実際に音楽に合わせて一緒に踊りました！最後に、みんなで輪になって愉快的ルワンダのダンスを楽しむことができました。



## 11月のカフェ企画のお知らせ

11月のカフェは、通常通り、第1・3水曜日にオープンします。

※11月3日は、日本語学校生対象のまち歩き企画のため、一般の方はご参加いただけませんので、ご了承下さい。

11月19日のカフェでは、7月に好評だった高麗博物館さんとのコラボ企画第二弾を開催します。

日時: 毎月第1・3水曜日 13:00-17:00  
場所: 日本福音ルーテル東京教会  
東京都新宿区大久保1-14-14 (JR新大久保駅から徒歩5分)

**11月の予定**

営業日	イベント企画
11月5日(水)	大久保多文化共生防災まち歩き (日本語学校生対象)
11月19日(水) 13:30-16:00	大久保・歌舞伎町まち歩き (参加費無料・事前申込制)

※イベントの内容・日程は事前のアナウンスなく変更する可能性がありますのでご了承ください。

高麗博物館コラボ企画 第2弾

高麗博物館  
고려박물관 KOREA MUSEUM

**大久保・歌舞伎町まち歩き**

7月に好評だった高麗博物館とのコラボ企画第2回目はフィールドワーク!  
今回は『もうひとつのソリアンタウン』だけじゃない!  
高麗博物館ガイドと足を延ばして歌舞伎町まで行くディープなまち歩きです。

日時 **2023.11.19(水)**  
時間 **13:30~16:00**  
場所 **日本福音ルーテル東京教会**  
東京都新宿区大久保1-14-14 (JR新大久保駅から徒歩5分)  
定員 **15名**

▼申し込みフォーム▼

**事前申込制・要予約**

ガイド・プロフィール

岩元修一さん  
高麗博物館理事  
元生活協同組合職員

共催: コミュニティ・カフェ@大久保

お問い合わせ: CWS Japan牧 (03-6457-6840, public@cwsjapan.jp)

公益財団法人 ウェスレー財団  
Wesley Zaidan

今回は新大久保のほかにも、足を延ばして歌舞伎町のエリアまで高麗博物館によるガイドと一緒に歩く、ディープなまち歩きフィールドワークです。

このエリアの街の歴史や暮らしなどに関心のある方は、ぜひご参加ください！

参加希望の方は、フォームより事前にお申し込みください。

▶[申し込みフォームはこちら](#)

だんだんと秋も深まってまいりましたが、お近くにいらした際はぜひお立ち寄りください。

コミュニティ・カフェ@大久保の各種SNSはこちら。

[Facebook](#) / [Instagram](#) / [X\(旧Twitter\)](#)

(文：プロジェクト・オフィサー  
五十嵐望美)

特定非営利活動法人CWS Japan

〒169-0051

東京都新宿区西早稲田2-3-18

日本キリスト教会館25号室

メールアドレス：

[public@cwsjapan.jp](mailto:public@cwsjapan.jp)

電話：

03-6457-6840



[CWSJapan](#)



[@Japan\\_CWS](#)



[cws\\_japan](#)